

梅崎勇*・今野郁**：植物の研究に心血を注いだ野田光蔵先生
Isamu Umezaki*・Kaoru Konno** : Mitsuzo Noda (1909-1995)



元新潟大学教授及び新潟薬科大学名誉教授野田光蔵先生が平成7年4月3日に新潟中央病院にて呼吸不全のため逝去されました。享年86才でした。生涯にわたり満州植物誌、越後の植物誌及び日本海の高藻の研究に心血を注いだ先生のご業績を称えますとともにご逝去に対して謹んで哀悼の意を表し、ここに、先生の略歴とご業績の一部をご紹介します先生の生前を偲びたいと思います。

野田先生は生前満州植物誌を中心とした白叙伝なる「還ってきた植物誌原稿」(自費出版)(1965)、「植物と共に我れ50年」(自費出版)(1982)、「満洲植物誌の思い出—中国動乱の中にて—」風間書房(1992)を出版されましたが、この3書から、先生の満鉄社立満州教育専門学校入学から満州での教員生活、卒業と同時に満州の植物の研究に着手され、さらに、北大理学部植物学科に進み、山田幸男先生の下で海藻学を専攻、以後の満州植物誌の完成及び藻類の研究に捧げた生涯を詳しく知ることができます。

先生は満州教育専門学校を卒業(昭和5年)されてより、満鉄教育研究所(昭和6年)、満鉄公主嶺農業学校(昭和12年)及び在満公立新京第二中学校(昭和15年)で教鞭を執られ、かたわら恩師大賀一郎先生の後継として満州博物学会を主宰(昭和6年)、在満学術協議会委員(昭和8年)及び満州国大陸科学院研究業務を委嘱される(昭和19年)など終戦に至るまで満州の植物の研究と同じく学校教育と学会の発展にも尽力されました。

新京で終戦を迎えたご一家に苦しい生活が続き日本へ帰ることになりましたが、「満州植物誌」の原稿を持ち帰ることが不可能のため、奥さんご子息を先に帰国させられ、単身残留されました。幸いにも国立長春大学農学院(昭和21年8月)で植物誌の研究を続けることができました。しかし、内戦がますます激化し、昭和22年7月長春を脱出され、難民旅行の中を沈陽(奉天)に到着しました。沈陽農学院に職を得て、後に哈爾濱に移り、東北農学院の教授(昭和23年10月)として迎えられました。先生の植物研究室は発展的に改組されて東北植物調査研究所となり、さらに中国科学院林業研究所と改称されました。その時、中国全東北区の植物調査計画が生まれ大々的な植物調査旅行に出かけました。その後標本の整理と研究を続け、植物誌の原稿が補充され完成されました。こうして、過去26年の苦難の結晶3000種を記載することができましたが、折しも昭和27年12月に在中國日本人の帰国問題が知らされました。そのため、学院長から原稿の日本への携帯の許可をいただき、翌年7月5日哈爾濱を出発しましたが、途中(7月17日)沈陽で「植物誌原稿」が没収されました。種々努力されましたが、聞き入れられなく失意のまま興安丸に乗船して26年ぶりに帰国しました。翌年(昭和29年)1月山田先生の推薦で新潟大学で教鞭をとることになりました。そして、再び海藻の研究に着手し、かたわら没収された「植物誌原稿」の返還を受けるべく努力されました。昭和30年12月に日本学術協議会長茅誠司先生の招聘でご訪日の中国科学院長郭沫若先生が原稿を持参下され、野田先生に直接手渡されました。遂に念願の原稿が還ってきました。当時の朝日新聞にこのことが大きく報道されましたが、思い出される方も多いと思います。

なお、先生は昭和18年11月満州から北大に留学しました。その時学位論文を完成し、山田先生の校閲を受けましたが、日本での印刷が不可能となり、原稿は満州へ持ち帰らねばなりません。終戦帰国後、先生は学位論文として「満州植物誌」全体として提出するつもりでしたが、余りにも膨大な量の為、藻類の部「Algae of the North-Eastern China and Korea」として出されました。山田先生主査により昭和34年10月14日、北大理学部教授会で承認されました。本論文は満州の遼東半島、長山列島、山東半島(青島)及び朝鮮半島

の海藻 231 種 5 変種 5 品種と満州淡水藻類 179 種 22 変種 3 品種について記載した分類学的研究です。

還ってきた満州植物誌の原稿を整理し、昭和 45 年度文部省科学研究費助成金（研究成果刊行費）の交付を受け、昭和 46 年 5 月「中国東北区（満州）の植物誌」風間書房（1971）として刊行されることになりました。即ち、本書の第一部は羊歯植物、裸子植物、単子葉植物、第二部は双子葉植物、離弁花類、第三部は合弁花類、第四部は下等植物を英文として藻類及び菌類、地衣類、蘚苔類からできており、1656 頁に及ぶ大冊です。なお、本書の巻頭に英文で満州植物研究史として、ロシアの植物学者 C. J. Maximowicz (1827-1891) による 1859 年の「黒竜州地方植物誌」の研究から外国人及び多くの日本人学者の研究に至るまでを紹介しています。また、満州フロラを 5 区域に分類し、区域内を幾つかの植物群系に分けています。

野田先生は昭和 29 年に新潟大学理学部に就任以来一貫して新潟県、佐渡島を中心に、さらに津軽海峡及び北海道南西域の小島に至るまでの日本海の高藻フロラの研究に没頭されました。そして、昭和 62 年にご自身の研究と日本、ロシア国、韓国の藻類研究者の論文に基づいて日本海（南樺太、極東ロシア、朝鮮半島東南海岸、日本九州、本州、北海道の日本海側）の高藻をまとめられ「Marine Algae of the Japan Sea」（日本海の高藻）（文部省助成学術図書）風間書房（1987）を出版され、昭和 29 年以來の日本海の高藻の研究の総決算をされました。

先生は在満中に東北農学院植物調査研究所でロシア植物学者スクボルツォフ博士（B. V. Skvortzov 1896-1980）と共同研究をされましたが、博士のブラジルへの移住後も先生の日本へ帰国後も共同研究を続けられ 34 篇（1967-1971）の研究論文を発表されました。

先生は満州植物誌の分類学研究の経験を生かして新潟大学で同県の植物を調査研究して「越後の植物誌」I-IV（1968-1971）を刊行され、郷土の文化の発展に寄与されました。昭和 46 年 11 月 3 日新潟県下の植物研究と「越後の植物誌」の完成に対し、第 24 回新潟日報文化賞を授与されました。なお、昭和 47 年 5 月に新潟県下で第 23 回全国植樹祭の際に、昭和天皇・皇后両陛下に「越後の植物」についてご進講申し上げました。

先生は昭和 29 年 1 月新潟大学（理学部）助教授に就任され、昭和 38 年 5 月教授に昇任、昭和 50 年 3 月定年により同大学を退官されました。在任中に理学部付属臨海実験所長を兼務されました。退官に引き続いて、同年 5 月新潟医療技術学校副校長を務められ、昭和 52 年 4 月新潟薬科大学教授（教養部長）となり、昭和 55 年 3 月退職されました。そして、同年 4 月同薬科大学

から名誉教授の称号が贈られました。帰国後 30 年間日本海の高藻の研究に精根を捧げられましたが、大学での研究の他に新潟県自然公園審議会委員及び新潟県沿岸漁業構造改善協議会委員を務められました。また、昭和 40-41 年の日本藻類学会評議員として活躍され、多くの論文を投稿され、また雑録記事を載せられました。

新潟大学にあつては優しい中にも厳しく指導されました。例えば、講義の遅刻は決して許されませんでした。しかし、卒業後も断えず連絡をとり、激励の言葉と共に先生の著書や論文の別刷りを送って下さり、しばしば卒業生の実地指導をして下さる人情豊かな学者先生でした。また、満州で教えを受けた教え子達は先生を慕い続け、度々お招きして謝恩会を開催されたとうかがっています。島根大学名誉教授秋山優博士は新京第二中学で教えを受けましたが、とくに理科室で顕微鏡を覗く研究者としての先生の後ろ姿を見て、敬愛し憧れるようになりました。終戦後帰国して先生と同じ北大に進み、山田幸男先生の下で藻類学を専攻し藻類学者となった愛弟子の一人です。

先生は教専で教えを受けた先生方、とくに初代校長保々隆矣先生及び大賀一郎先生、北大の先生方特に山田幸男先生及び松浦一先生への尊敬の念と謝恩を生涯忘れることがありませんでした。満州で苦難されたとき援助下さった中国の多くの方々、さらに長春で砲弾の炸裂の中をも植物のスケッチをしてくださった江原和江さんへの感謝の心を先生の著書の中でうかがうことができます。

先生は昭和 61 年春の叙勲で勲三等旭日中授賞を授与されました。

先生のご遺族は未亡人（フサエ様 84 才）の他にご令息浩司様（筑波大学教授、地質学）、嶺志様（立教大学教授、歴史学）と邦彦様（会社員）、5 人のお孫様がおられ、円満なご一家だとうかがっています。なお、先生は明治 42 年 10 月 12 日福岡県大牟田市に生まれ、中学卒業後単身満州に渡り教育を受け、満州と植物と人間と共に愛し続けた九州男児でした。

先生の研究業績は前述の「還ってきた植物誌原稿」及び「植物と共に我れ 50 年」の巻末にそれぞれ 1932-1969 年及び 1932-1982 年の部が掲載され、167 篇の論文を発表されました。さらに、その他として講演題目、新聞投稿題目、雑誌への雑録記事のリストも載っています。

(*〒917 福井県小浜市学園町 1-1 福井県立大学生物資源学部海洋生物資源学科・**〒014 秋田県大曲市栄町 6-7 秋田県立大曲高等学校)